


5. 座右の銘

阿部氏が座右の銘とする言葉のいくつかを紹介しよう。

● 九思一言

意味は、物事の是非、善悪を十分に考察したうえで言葉を発することである。「孔子曰く、君子に九思あり、視は明を思い、聴は聡を思い、色は温を思い、貌は恭を思い、言は忠を思い、事は敬を思い、疑は問を思い、^{ぶん/いかり}分は難を思い、得を見ては義を思う」から由来する。九思は、論語で説いている君子の思う九つの事柄、すなわち明・聡・温・恭・忠・敬・問・難・義のことである。

- 人生には、思うに任せぬ境遇に立たされることが幾たびもある。嘆かず、腐らず、あせらず、「じっとこらえて今に見ろ」と不屈の旗を振り通していくことだ。（「連載『ヒーローズ 逆境を勝ち越えた英雄たち』第1回 ネルソン・マンデラ」（「聖教新聞」2020年11月1日掲載）

ネルソン・マンデラ（1918-2013年）は、反アパルトヘイト  政策を訴えた活動家として有名である。紆余曲折を経て1994年の南アフリカでは初となる民主的な選挙において初の黒人の大統領に就任した人物であり、不屈の精神を持った政治家・弁護士である。

- 歴史の光に照らしてみても、恐れるよりは希望を持つ方が、やらないよりはやる方が、より賢明なことは明らかである。それに、「そんなことできるわけがない」という人間からは何一つ生まれただめしがないということも、動かすことのできない事実なのである（「連載『ヒーローズ 逆境を勝ち越えた英雄たち』第7回 エレノア・ルーズベルト」（「聖教新聞」2021年5月16日掲載）

エレノア・ルーズベルト（1884-1962年）は、第32代アメリカ大統領フランクリン・ルーズベルトの妻である。エレノアは、婦人運動家としても高名であり、闘う女性であった。フランクリンの良き理解者であり、フランクリンを陰で力強く支えた人物である。

「持続は力なり」

最後に、阿部さんからのメッセージである。

諸先輩の永年のキャリアにより蓄積されたノウハウを生かして頂き、機械の機能の活用方法、保全、修理、織物組織変化知識、風合、不良品等の対処方法のアドバイスにより技術、知識の習得。かつて職人といえば、先輩のやっていることを「見て覚えろ」「技術は盗め」の時代でもあった。今は少し違ってきている。それは、安閑と前例を踏襲しているだけでは取り残されていく危機の時代でもある。

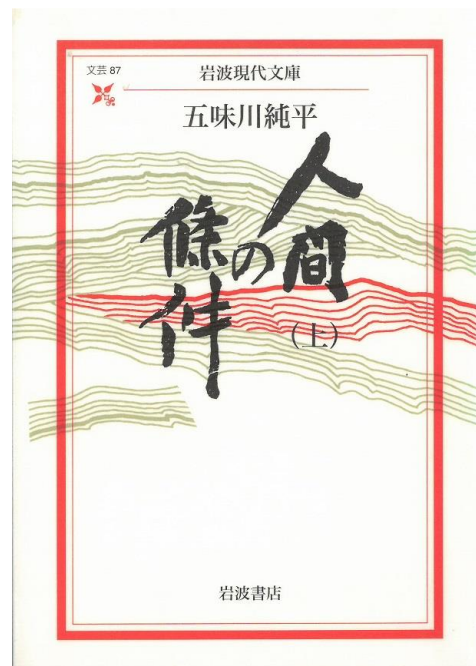
アナログからデジタル、そしてAI（人工知能）の導入と日々技術が進歩している。新しい機械の導入により昨日まで培ってきた知識、技術が全く役に立たなくなることもある。ただ、いくら技術が進歩しようとする物づくりにアナログな部分がゼロになるということはない。今後も技術の進歩の速度は、ますますスピードアップしていくと思われる。新しい機械の機能、技術に意欲を持ってトライしていくことが求められる。次世代への継承、誰人も日々精進し、付加価値を高めて生き残り、今を懸命に生き、一日一日与えられた仕事を持続することの大切さ。

「持続は力なり」そして、仕事を通して技術のみならず、より一層の人格形成を目指していきましょう。

6. おすすめの本

阿部氏は読書好きである。今までにたくさんの本を読んできた。歴史小説を中心に、印象に残っている本を以下で挙げる。

- ◆ アレクサンドル・デュマ、山内義雄訳『モンテ・クリスト伯』全7巻、岩波書店（岩波文庫）、1979年。
- ◆ 芦田孝昭『中国の故事・ことわざ』現代教養文庫、1971年。
- ◆ 梶山季之『鼻下短』光文社、1974年。
- ◆ 山岡壮八『徳川家康』全26巻、講談社、1974-1979年。
- ◆ 池波正太郎『雲霧仁左衛門』前編・後編、新潮社、1979年。
- ◆ 吉川英治『三国志』全8巻、講談社（吉川英治歴史時代文庫）、1989年。
- ◆ 吉川英治『新・平家物語』全16巻、講談社（吉川英治歴史時代文庫）、1989年。
- ◆ 毛沢東、竹内実訳『毛沢東語録』平凡社、1995年。
- ◆ 司馬遼太郎『竜馬がゆく』全7巻、文藝春秋（文春文庫）、1998年。
- ◆ 五味川純平『人間の条件』上中下巻、岩波書店、2005年。
- ◆ 石原外喜義『弱くても勝てる強くても負ける』幻冬舎、2017年。
- ◆ 山崎真由子『職人の手』KTC中央出版、2019年。
- ◆ 西林克彦『知ってるつもり：「問題発見力」を高める「知識システ



五味川純平『人間の条件』上巻、岩波書店、2005年（今治市立図書館所蔵）。

ム」の作り方』光文社、2021年。

読書も趣味のひとつであるが、最近は野菜づくりに凝っている。およそ120㎡の畑を妻の鈴子氏と一緒に耕し、季節の旬の野菜をつくっている。たとえば、春はインゲン豆、アスパラガス、ニンニク、夏は小玉スイカ、茄子、トマト、秋はかぼちゃ、サツマイモ、落花生、冬は小松菜、ほうれん草、カブラなどである。

野菜づくりの合間をぬって、料理も嗜む。得意料理は、きんぴらごぼう、たこ焼き、肉うどん、麻婆豆腐など庶民的で家庭的なものである。タオルづくりにおいて第一線を退いた今、阿部氏は後進指導に心血を注ぐ傍ら、少年の頃、大嫌いだった農業に興味の時間をあて楽しんでいる。（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）

参考文献

愛媛県経済労働部管理局老生雇用課「愛媛労働」第775号、2014年1月15日。

佐藤亮平他「サッカーにおける技術・戦術的特質に関する研究：オフサイドを中心として」北海道体育学会『北海道体育学研究』54号、2019年、53-61頁。

四国タオル工業組合提供資料「地区別組合員名簿」1970年11月30日、31頁。

編集後記

コロナ禍が収束の兆しを見せず、「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会」（2021年7月～9月に実施）が開催されている関東首都圏では感染者が過去最多を記録するなかで、このたびのインタビューをおこないませんでした。昨年に引きつづき、オンラインでのインタビューです。阿部さんには事前にたくさんの資料をご用意してもらい、おかげさまでスムーズに

お話を進行できました。

初代タオルマイスターのひとりとして、産地の将来のために今も現役で精力的に活動されている阿部さんの姿こそ、後世の人材育成にとって大きな意味があるとおもいます。「モノづくりは人づくり」だと自信を持って語る阿部さんは、中国やロシアにも技術指導に赴き、それを実感されました。今治タオルの将来を担う若い世代にも阿部さんの思いが伝わるように、われわれも情報発信していきます。

インタビューの際、機材の不具合によって阿部さんの姿をオンライン越しに拝見できませんでした。後日、インタビュー当日の阿部さんの写真を拝見したら笑顔が素敵でしたので、ここに掲載させていただきました。コロナ禍が収束したら、ぜひ対面でお会いしたいです（2022年1月26日に実現）。コロナ禍によって当たり前前（ご）のことが当たり前でなくなった現在、「対面」のありがたさを一入（ご）感じたインタビューでした。



次回の「タオルびと」

「タオルびと」の31人目は、（株）黒田工芸代表取締役社長の黒田周悟氏である。黒田工芸は、タオル生産の仕上工程のうち捺染（プリント）加工をおこなう会社である。創業から60年以上にわたり、タオル向け捺染加工を専業とし産地の発展を支えてきた。同社を率いる黒田氏に、「捺染とタオル」の歩みについて話をうかがう。

